

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】 邵 天澤

【所属】 (助成決定時) 京都大学大学院 人間・環境学研究科 国際社会論分野

【研究題目】 冷戦期中国の対欧州外交—対東西ドイツ政策を中心に (1949-1964)

## 【研究の目的】 (400字程度)

本研究は、冷戦期の中国が「向ソ一辺倒」を国是とする 50 年代初期から、中ソ対立が激化し対外戦略を修正した 60 年代前半を対象に、欧州地域に向ける中国の外交戦略とその対東西ドイツ政策を外交史的アプローチによって明らかにすることを目的としている。そして、2021年度の研究内容は、上記研究題目の重要な一環として、中国と東ドイツが建国した1949年初期から西ドイツがパリ協定により主権の回復が果たされる1955年までの間に、中国が貿易協定を通じて対東ドイツ支援の過程を主に両国の一次史料に基づいて検証し、その特徴について論ずることである。その目的は、冷戦初期の段階において、中国は如何に「ドイツ問題」への関与を確立させたのかを明らかにすることである。

## 【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究は、まず、伝統的な外交史的なアプローチを採用し、何よりも実証主義に徹するマルチ・アーカイヴァルの手法を重視する。

2021年度の研究内容の範囲を1949年から1955年までの中国・東ドイツ関係にし、両国関係の樹立から変容の過程を検証する。その中、特に1951年の「中独貿易協定」、1953の「補足貿易協定」、1955年の「中独友好協力条約」を中心に、両国の交渉過程と結果について考察を行う。その結果、以下のような内容がわかった。

1949年10月27日に中国と東ドイツの間で正式に外交関係が樹立されてから、1955年12月25日に中独友好協力条約が締結されるまで、この期間は基本的に中国と東ドイツの関係発展における第一段階と見なすことができる。この時期、両国関係は基本的に相互の接触と理解の初期段階にあり、両国とも新体制が発足したばかりで、まだお互いをよく知らない状態であった。しかし、両国ともマルクス・レーニン主義思想の政党が統治していたため、両党・両国は当然、「兄弟の政党」、「兄弟の国」と見なしていた。東ドイツと中国の友好関係が確立した当初は、同国がより積極的に中国に援助を求めた。中国も極力東ドイツの要求を支持し、受け入れようとした。

特に注目すべきことは、中国の東ドイツの「面倒」を見ようとした姿勢である。1951年の中国と東ドイツの貿易協定交渉の際、西ドイツ社会や民衆に対する東ドイツの統一戦線戦略を支援するために、中国が西ドイツとの貿易を東ドイツに「仲介」してもらうことに原則合意し、結局両国とも巨額の対外貿易損失を被る事態までは発展した。また、1953年の「東ベルリン暴動事件」後、東ドイツ政府は自国の食糧難の問題を解決するため、中国に1953年の補足貿易協定の締結を要請し、中国は国内事情が逼迫していたにもかかわらず、5300万ルーブル相当の農産物を東ドイツに供給した。1955年に東ドイツとソ連の関係条約が締結された後、東ドイツは自国の主権をさらに外交的に認めるために、中国に中独友好協力条約の締結を求め、中国は年末にすぐにこれに承認し、中独関係は新たな段階に突入した。

## 【結論・考察】 (400字程度)

申請者は松下幸之助志財団の研究助成を受け、2019年10月から2020年9月までの一年間で、中国の欧州外交と対東西ドイツ政策をめぐって資料収集、分析を行い、以下のことを明らかにした。

冷戦初期の中独関係は、イデオロギーに満ちるものであった。上記に触れたように、1949年の両国の建国から1955年の中独友好条約まで、この期間は基本的に中国と東ドイツの関係発展における第一段階である。この時期、両国はお互いのことをよく知らない状態にも関わらず、両国ともマルクス・レーニン主義思想の政党が統治していたため、両国関係が急展開した。しかも、通常の家間関係を越え、「兄弟の政党」、「兄

弟の国」とお互いに称し、ときに国家利益を無視して相手国に援助したこともあった。例えば上記に挙げた中国は西ドイツとの貿易を東ドイツの介入と仲介を許した事例、朝鮮戦争などにより国内事情が逼迫したにも関わらず、東ドイツからの要請をすぐに受け入れて援助した事例、このような通常の国家関係（国益重視と対等な立場）と異なる特例主義が通奏低音のように中国・東ドイツ関係に流れ、両国関係の特徴を物語る。また、研究を通じて、中国は明確な意思を持って「ドイツ問題」への関与を確立し、その過程を明らかにできた。欧州冷戦は決して中国とは無関係ではなく、逆に初期の段階から中国は果敢に関わっていた。